

9月21日～23日の連休日、全日本マスタース陸上競技選手権が京都・西京極の「たけびしスタジアム京都」で開催された。1980年に和歌山県で始まってから45回目、41～43回大会はコロナ禍で中止、昨年44回大会が山口県で再開された。筆者は92年に満60歳で初参加。その後28回出場してきた。思い起こせばどの大会にも様々な思い出がある。中でも97年、65歳で出場した大分大会の100歳で出した日本記録(12秒92)は生涯忘れられない思い出である。すでに日本記録は破られているが、奈良県記録として今も輝いている。

全日本マスタース陸上競技選手権大会を振り返る

目標あるから頑張る

また全国大会の100歳、200歳、走り幅跳びの3種目優勝(三冠王)を3回(73、75歳)達成できたことは、後世に残るところである。今年大会は、これまでと変わって参加者

年齢順に仕組まれていた。No.1は100歳で800歳、1500歳に出場した宮田義光さん(鹿児島)、No.2は100歳、200歳出場の沖縄の亀浜敏夫さん98歳、彼とはここ数年100歳で同じ組で

競ってきた。No.3は砲丸投げに出場の重藤哲弥さん(福岡)93歳、筆者は92歳でNo.4をいただいた。ちなみに男子90歳以上の出場者は10人、女子の最高齢は91歳であった。大会1日目の走り幅跳びは午前10時開始。気温38度を超える真夏

日に相当するコンディションとなった。1回目の跳躍で2歳40の今季最高、昨年を上回る好記録が出た。しかし2回以降は伸びず、最後は鹿児島県の浜崎行雄選手に逆転されて2位。翌日は前日と打つ

て変わり早朝から雨、午後1時スタートの100歳、雨中のウォーミングアップもままならず迎えたレース、スタートから中間は快走でトップに立って、ゴール寸前では勝ったと思ったが、電光掲示板の表示は2位、悔しい結果となった。敗れた

相手はまたも前日の走り幅跳びで逆転された浜崎選手。彼は今年90歳クラスに上がってきた新鋭、90歳台で3歳の年齢差は、敗れても仕方がないと言い訳で自己納得。しかし成績は年の差もあるが、日々練習に取り組み努力が成績に現れると考え

るから頑張れる。全国大会で出会った宮田さんや亀浜さんらも良い目標になる。また日頃の練習を支え励ましてくれるクラブの仲間たちにも感謝したい。彼らがいるから続けられるのだ。年々年を重ねて「いつまでも若くないのだから、ぼくは」と周りが言われる。しかし「50、60ははなれた小僧、70、80働き盛り、90になって迎えが来た

ら100まで待てと追い返して、新札1万円の顔で有名な渋沢栄一氏の名句もある。年が改まれば93歳、来年の干支(えと)は乙巳(蛇)、脱皮して生まれ変わる、努力を重ねて新しいことに挑む年らしい。支えてくれる多くの仲間や家族に伝えるためにも、まずは健康で新しい目標に向かって挑戦しよう。

第4土曜日掲載



全日本マスタース陸上競技選手権で走り幅跳びの跳躍をする筆者＝京都・西京極の「たけびしスタジアム京都」